

# 下総東部における終末期古墳の様相

荻 悅 久

## はじめに

1. 首長墓の変遷
2. 終末期古墳

## 3. 初期寺院

おわりに

### 論文要旨

下総東部は地形的に完結した地域ではなく、小地域ごとに首長墓の消長がみられる。

古墳時代後期後半には各地に有力古墳が築かれ、他地域に比肩し得る内容を備えていた。ところが、終末期になると大型古墳は認められない。長方形墳・森戸大塚古墳の、周溝を含めた長辺50mが当地域最大規模であり、出土遺物でも目を引くものは少ない。当地の終末期古墳は、岩屋古墳や駄ノ塚古墳・割見塚古墳に比べると、劣勢にあることは明らかである。また、前代からの墓域を継承する例は稀で、新たに台頭した層が、終末期古墳被葬者の大半を占めるものと思われる。そして、初期寺院にあっては、そのすべてに山田寺系の瓦当文様が採用されることからみて、印旛沼周辺勢力の影響下にあったことが理解できる。

終末期に至っての大きな変化は、在地の要因では説明できない。印旛沼周辺の様相も考えあわせると、下総全域に及ぶ、7世紀前葉の豪族再編成を想定できる。